

ひょうごの遺跡

平成8年8月2日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
TEL 078-531-7011
FAX 078-531-7014

木製品特集(1)・平成8年度復興調査速報

遺跡出土の木製品と保存処理

〔クスノキの年輪〕

日本の文化を特徴づけるものの一つに、建築、家具、調度品そして食器等生活のあらゆる面で木を使用した文化があります。全国各地の発掘現場においても、建築部材をはじめ各種の木製品が次々と発見され、古くから日本人が木の文化を大切に継承してきたことが再認識され始めています。

兵庫県内の低地（特に但馬地域の低湿地）の遺跡も、最近の調査で木製品の宝庫であることが判ってきました。そこで、今回は木製品の種類とそれに欠くことの出来ない科学的な保存処理方法の特集を、そして平成8年度の震災復興に伴う発掘調査の速報をお届けします。

県下で最初に木製品が発見されたのは、昭和36年に行われた尼崎市上ノ島遺跡①の発掘調査です。弥生時代前期の農具（鋤）と建築部材等が出土しました。次いで、昭和40年に同じく尼崎市田能遺跡②で木棺等が見つかっています。その後、多量に確認されたのは昭和50年代はじめの姫路市長越遺跡③と、昭和60年代はじめの神戸市玉津田中遺跡④の調査です。弥生時代から古墳時代にかけての農具（木製品を含む）と祭祀具等が出土しています。さらに、その後の調査では、但馬地域の低湿地に存在する遺跡（出石町砂入遺跡⑤・袴狭遺跡⑥・入佐川遺跡⑦・宮内堀脇遺跡⑧）で、奈良時代から平安時代にかけての祭祀具や、室町時代から安土桃山時代にかけての漆器と箸を主とする木製品が数万点見つかり、全国的に注目されています。



井堰の断ち割り写真（袴狭遺跡）弥生～古墳時代

木製品の種類

木製品と一口に言っても、それは材質が木であるという点が共通するだけで、その用途は様々です。

材料となる木は、種類によりそれぞれ硬さ、色、強さ等異なった性質を持っており、この木の特色を生かした利用がなされています。例えば、『日本書紀』巻第一神代に素戔鳴尊が「杉と檣樟、このふたつの樹は浮宝（船）とせよ。檣は瑞宮（めでたい宮）を作る材料にせよ。被は青人草の奥津棄戸（墓所）の棺を作る材料にせよ。……」と述べているのです。

そこで、まず機能を中心にした分類を揚げ、その中から具体例を見てみましょう。

建築部材	…建物柱、扉、梯子など
土木部材	…井戸枠、橋脚、井堰など
葬送具	…木棺、木製樹物（墳輪）など
工具	…斧・鋸等の柄、木槌、掛矢、楔など
農具	…鋤、鍬、竪杵、木錘、田下駄など
紡織具	…糸巻、紡輪、織機など
運搬具	…舟、車輪、輓、背負子など
漁労具	…舟、網杵、浮子、權など
武具	…刀剣装具、楯、弓など
服飾具	…檣扇、櫛、木履、下駄など
食事具	…俎、匙、箸、漆器、播粉木など
容器	…挽物皿・碗、割物鉢・槽、曲物など
籠・編物	…籠、箕など
文房具	…算木、物指、木印、木簡など
遊戯具	…独楽、将棋駒など
祭祀具	…武器形、人形、馬形、斎串など
楽器	…琴、笛、箏など
調度具	…机、腰掛、箱など

建築部材 玉津田中遺跡、入佐川遺跡等で弥生時代から古墳時代のものが見つかり、また、扉（写真1）も出土しています。梯子は、葭池北遺跡⑨（篠山町）、辻井遺跡⑩（姫路市）等に発見例があります。

土木部材 井戸枠は上原田遺跡⑪（写真2）・辻井遺跡・播磨国分尼寺跡⑫（姫路市）、但馬国分寺跡⑬・祢布ヶ森遺跡⑭（日高町）等で奈良時代のものが発見されています。橋脚は、吉田南遺跡⑮（神戸市）と入佐川遺跡で見つかっています。

葬送具 弥生時代の木棺が田能遺跡、原田西遺跡⑯（伊丹市）、玉津田中遺跡（写真3）・新方遺跡⑰（神戸市）等で出土しています。

工具 槌や柄が長越遺跡・辻井遺跡、山垣遺跡⑱（春日町）、雨流遺跡⑲（三原町）等で出土し、墨壺

が栄根遺跡⑳（川西市）に見つかっています。

農具 長越遺跡・丁柳ヶ瀬遺跡㉑（姫路市）、玉津田中遺跡（写真4）・戎町遺跡㉒（神戸市）、上ノ島遺跡等で弥生時代の鋤・鍬が出土しています。また、馬鍬が山垣遺跡、辻井遺跡、出合遺跡㉓（神戸市）に、犂が梶原遺跡㉔（市島町）、川除藤ノ木遺跡㉕（三田市）で見つかっています。田下駄は、袴狭遺跡をはじめ多くの遺跡で発見されています。

紡織具 糸巻と紡輪は、葭池北遺跡、長越遺跡に古墳時代のものが、そして吉田南遺跡、袴狭遺跡等で奈良時代から平安時代のものがみつかっています。

運搬具 古墳時代の舟が栄根遺跡（川西市）に、車輪が吉田南遺跡に、背負子が辻井遺跡にそれぞれ発見されています。

漁労具 縄文時代の舟が佃遺跡㉖（東浦町）、網杵が袴狭遺跡、浮子は筒江片引遺跡㉗（和田山町）等で出土しています。

武具 玉津田中遺跡、南八代田遺跡㉘（日高町）に弥生時代の楯の出土例があり、入佐川遺跡に刀の把頭が見つかっています。

服飾具 木履と檣扇は、但馬の深田遺跡㉙（日高町）と袴狭遺跡（写真5）に発見例があります。檣扇は弥生時代のものが東武庫遺跡㉚（尼崎市）にあり、古墳時代のものは水堂古墳㉛（尼崎市）、法花堂2号墳㉜（香寺町）等でみつかっています。下駄は山垣遺跡、袴狭遺跡等に奈良時代から平安時代にかけてのものが、加茂遺跡㉝・書写坂本城跡㉞（姫路市）等では中世のものがみつかっています。

食事具と容器 奈良・平安時代の役所関係の遺跡と、中世の居館や城跡に、漆器や箸が確認できます。

文房具 木簡（写真6）が、奈良・平安時代の役所関係の遺跡や中世の居館等からよく発見されます。

遊戯具 中世の独楽と将棋の駒が玉津田中遺跡、袴狭遺跡、宮内堀脇遺跡に出土しています。

祭祀具 人形と馬形等が、奈良・平安時代の役所関係の遺跡に多くみつかっています。県下で初めての人形は、但馬国分寺跡出土です。また、弥生時代の武器形のものが玉津田中遺跡にあります。

楽器 琴が葭池北遺跡、山垣遺跡、袴狭遺跡等で見つかり、袴狭遺跡では琵琶に箏と考えられるものも出土しています。

現在、考古学の世界ではこの木製品を対象として、製作技術の研究、器種分類の研究、木材調製事務所蔵書印として年輪による年代測定の研究等が行われています。[木製品特集（2）へつづく]



木製品出土遺跡位置図



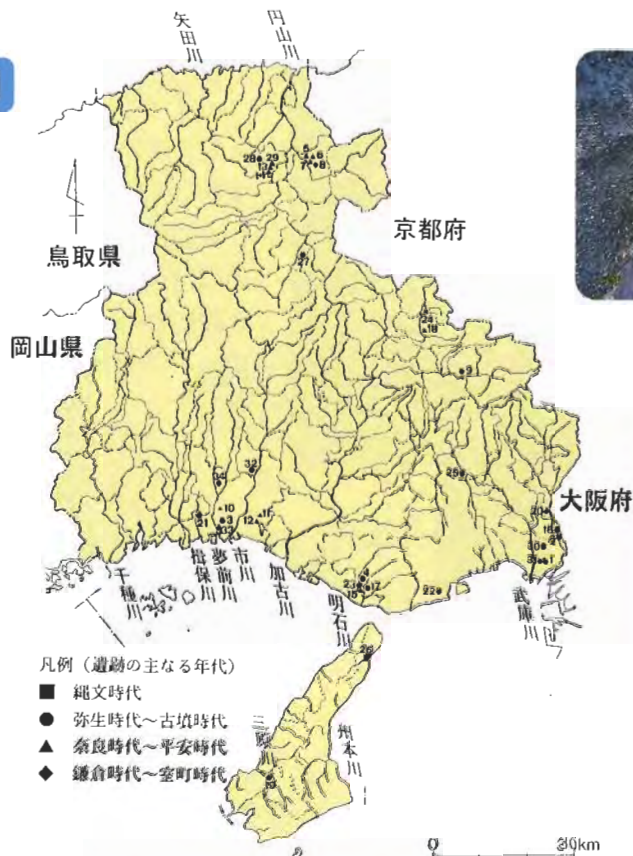
扉 (玉津田中遺跡④)



井戸枠 (上原田遺跡⑩)



木棺 (玉津田中遺跡④)



木履 (袴狭遺跡⑥)



木簡 (山垣遺跡⑧)

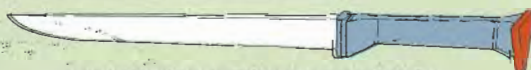


鋤 (玉津田中遺跡④)



茶笥 (竹製、袴狭遺跡⑥)

ここだけの遺物のはなし



入佐川遺跡出土の把頭と刀の全体図

《木製漆塗り把頭》

出石郡出石町の入佐川遺跡から、古墳時代中頃に使われていた木製の把頭が出土しました。形は厚みのある三角形で、左下図のように刀の握りの最端部にあたります。大きさは長さが約10cm、幅約5.5cm、厚み約3cmで、全体に漆が塗られています。

この把頭を引き立てているのは、正面と側面に施された装飾です。浮彫で、赤漆と黒漆に彩られた文様は、直線と弧で構成され「直弧文」と呼ばれています。古墳時代に流行したこの文様は刀装具の他、鏡・石棺・貝輪・器財形埴輪等にも施されています。直弧文を持つものの多くは、埋葬と祭祀の場である古墳から出土しています。そのため、この文様は単なる飾りではなく、鎮魂の呪力を持つものとして描かれていたようです。

左の写真をご覧になって、何か神秘的なものを感じられませんか。

出土木製品の保存処理 ——— PEG処理法 ———

遺跡から出土した木製品は、身近な生木よりも数倍から数十倍の水を含んでおり、非常に弱くなっています。したがって、これをそのまま放置し乾燥させると大きく変形してしまいます。そこで、形をできるだけ損なわないように、恒久的に保存するいろいろな方法が開発されています。ここでは、最も一般的な「PEG処理法」を紹介します。この方法は、ポリエチレングリコール（PEG）という化学物質を処理槽（PEGタンク）の中で、木製品に徐々にしみ込ませていくもので、私たちが昭和62年度からこの方法を採用しています。



処理前の写真を撮影し、特徴などを台帳に記録します。墨で字が書かれたものは、赤外線テレビカメラで観察します。



処理中に木製品が壊れたり、変形しないように布や金網で梱包します。

この後、カゴに入れてPEGタンクに浸します。

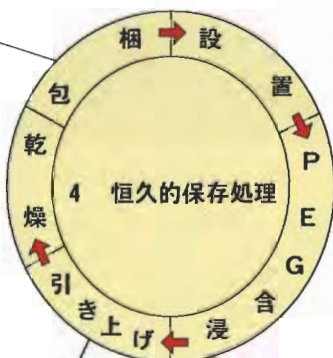


PEGタンクに浸してから約1年後、木製品を取り出します。お湯で表面の余分なPEGを洗い流し、布できれいに拭き取った後、自然乾燥させます。

1 水洗

2 台帳作成
事前調査

3 水漬保管



5 接合・着色
表面処理

6 処理後記録

7 収納・保管



コンテナやタッパー容器に水を入れて保管する以外に、特殊なビニール袋の中にパックします。こうすると持ち運びや観察が容易になります。



最初から、濃い液に浸すと変形するため、低濃度の液から始め、PEGを足して少しずつ濃度を上げていきます。



両方とも玉津田中遺跡から出土した弥生時代の鋤ですが、左はアルコールで表面処理をしているのでやや明るく仕上がっています。

平成8年度復興調査速報

郡家遺跡 (神戸市東灘区御影町)

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町郡家を中心に存在する遺跡です。その地名から、この周辺に摂津国菟原郡の郡衙があったと考えられています。調査は、昭和54年(1979)を初めとし、これまでに60回を超える発掘が行われ、弥生時代終末から古墳時代を中心とする遺構と遺物が発見されています。

今回の発掘調査は、阪神・淡路大震災の復興に伴うマンション建設に先立って、神戸市教育委員会が国庫補助事業により行うもので、当事務所の復興調査班が支援しました。

確認したのは、竪穴住居跡7棟と溝跡1条等です。ただし、現在も引き続き調査しており、今後遺構の数が増えることもあります。遺跡の年代は、3世紀から5世紀にかけてのものと考えられます。

竪穴住居跡のうち下の写真の住居は、4本の柱を持ち、竈が設置されていました。竈は建物の北壁中央に、粘土でしっかりと作られていました。年代は出土遺物から5世紀のものと考えられ、竈を持つ住居としてはかなり古い方に属します。



竪穴住居跡と付設の竈跡

この他の住居からは、竈は発見されませんでした。かわりに床面の中央部に浅い窪みを持つものや、焼けているものが見つかっており、これらの場所が火床であったと思われます。

発見した遺物には、古墳時代の土器(窯で焼いた須恵器と野焼きによる土師器)、当時の神まつりに使用した滑石製の玉(白玉)、鉄器の刃を磨く砥石、さらに前の時代(弥生時代終末期)の土器等があります。

これら遺物の中で、特に注目されるのが鞆の羽口や鉄滓という鉄器生産に関連するものです。鞆の羽口とは、鉄を精錬するための炉を高温にするのに用



発掘調査風景

いる送風具とその管です。また、鉄滓は鉄を精錬する時に出てくるカスのことです。これらの出土量はさほど多くはありませんが、調査地周辺に鉄器製作のための鍛冶工房があったことを示す貴重な資料といえるでしょう。

最後に、今回の調査の成果を揚げてみましょう。一つは、竈を持たない住居と持つ住居が発見されたことです。郡家遺跡では、竈の有無は年代差によるものと考えられ、竈の導入時期を具体的に押さえることができます。二つ目は、この周辺で鉄器生産が行われていたことが明らかになったことです。このことは郡家遺跡がこの地域の中心的な集落のひとつだった証拠と言え、古墳時代の集落研究に興味深い視点を提供してくれました。

〈追記〉

地域の皆さん方の強い要望により、6月15日には現地説明会を行いました。160名もの方々がこの遺跡を見学されています。

「祖先の人々は、1500年以上も前からこの地に住んで生活してきた。震災にめげずこれからもこの地で生きていこう。……」

私たち調査員が、見学に訪れた子供たちに一番伝えたい気持ちです。



現地説明会風景

あまがさき
尼崎城跡（尼崎市内）

尼崎城は尼崎市の南部、阪神電車尼崎駅の東南に位置しています。江戸時代、このあたり一帯の海岸が琴浦ことうらと言われていたことから、琴浦城とも呼ばれました。

尼崎城の名称は戦国時代からみられ、大永6年（1526）、細川高国が城を築いたのに始まります。この城は太物駅付近にあったと言われています。

江戸時代に入ると、戸田氏鉄により元和4年（1618）から数年かけて現在地に近世尼崎城が築かれ、城下町が整備されていきました。戸田氏以降、青山氏、松平氏が尼崎に入部し、松平氏の代に明治維新を迎えています。そして、明治6年（1873）廃城令により、城は取り壊され、堀も順次埋められました。

今回の調査は、尼崎城の本丸に位置していた城内小学校が阪神・淡路大震災で被災し、校舎の建て替えが計画されたため、これに先立って尼崎市教育委員会が当事務所の復興調査班の支援を得て実施したものです。調査面積は約1,400㎡で、3月から開始し、8月には終了する予定です。

発見した主な遺構は、礎石を据えつけるための坑と溝跡です。特に、注目されるのは調査区の中央で確認された礎石坑です。平面形は円形・方形で、直径ないし一辺が1m～2m、深さが0.3m～1mあります。その内側には0.5m～0.8mの大きさの花崗岩を3～4個入れており、中にはこの石が抜き取られたものもありました。東西・南北方向に規則的に配置されていて、本来あるべき礎石が抜き取られ、その下の根石が残存した状態であることが判明しました。地盤が砂で軟弱であるために、建物が傾いたり、沈下するのを防ぐための基礎造りとしてこうした工法が採られたのでしょう。

江戸時代の末に描かれた本丸御殿の絵図と発見した遺構を比較検討した結果、調査区は本丸御殿のほ



遺跡と周辺の景観

ぼ中央部にあたり、「大書院」、「上料理之間」、「御用部屋」等に該当することが判りました。「大書院」は政務・接客・儀式等の公務を行う場所で、「上料理之間」、「御用部屋」はこれらの用意を行ったり、控えの場等の公務を支える場所に相当します。

出土遺物は陶磁器類・瓦等の土製品の他、釘・煙管・寛永通宝等の金属製品や、硯・砥石等の石製品があります。その大半は瓦ですが、特筆すべきものは、「御臺所」と内面に赤く焼付けられた磁器の皿です。これは皿の所属する部屋を表したものと考えられます。

尼崎城周辺は明治以降市街化が進み、西側の外堀にあたる庄下川も護岸工事がなされ、当時の面影を残すものはありません。近年、城内で行われている発掘調査に加えて、今回行った発掘調査の成果が尼崎城の実像を知る貴重な資料になるでしょう。

なお、5月19日には現地説明会を開催し、城郭ファンに好評を得ました。



遺跡を上から見た写真



現地説明会風景

たかはたちょう

高畑町遺跡 (西宮市高畑町)

高畑町遺跡は、阪急西宮スタジアムの南側に位置しています。これまで、この場所に遺跡があることは知られておらず、当事務所が平成7年度に実施した確認調査により、弥生時代から中世にかけての集落跡が存在すると判ってきました。

今回の調査は、昨年度の調査地に近接して住宅・都市整備公団が計画した高層住宅の建設に伴い、5月13日から6月17日にかけて実施しました。その結果、弥生時代から中世にいたる集落跡が広がることが確認でき、予想以上の成果が得られました。

弥生時代の遺構には、東西方向に延びる幅1.5mの溝跡1条と北東から南西方向に流れる河川跡があります。この溝と河川からは多くの弥生土器が出土しましたが、明らかな建物跡等がないことから、この時代の集落は調査地の東側にあったと思われます。

次に、古墳時代では5世紀末から6世紀前半にかけての河川跡や掘立柱建物跡等を確認しています。

河川は弥生時代からのものがまだ流れており、岸边には護岸のために多くの杭が打たれていました。河川の中からは須恵器・土師器・木器等の他、滑石製の勾玉等が出土しました。これらの遺物は、土器に完形品が多いこと、剣の柄をかたどった木製品があること、滑石製玉類があること等から考えて、祀りに使用された後、河川の中に投棄したものと考えられます。

また、この河川とほぼ直交する南北方向に、もう1本の河川が見つかりました。これら2本の河川に挟まれた場所では、3間×3間の掘立柱建物跡2棟と、3間以上×5間以上の掘立柱建物跡2棟が確認されました。なお、掘立柱建物は柱穴の重なり具合から新旧の2時期に分けることができます。

さらに、これら掘立柱建物の特徴は建物の規模が大きいことと、柱を据えつけるための掘り方が円形

と方形であり一辺約80cmの大型であること等が揚げられます。こういった大型の掘立柱建物は、他地域で確認されているものとは趣を異にしています。

古墳時代では、一般の人々は主に竪穴式住居で暮らしていました。そうであれば、高畑町遺跡の掘立柱建物に住んでいた人は、竪穴式住居に住んでいた人々よりもより高い社会的地位にあったのではないかと推測されます。

このように考えると、高畑町遺跡周辺にはすでに消滅してしまった津門稲荷山古墳（長さ40m）と津門大塚古墳（長さ42m）の2基の前方後円墳があったことが、改めて注目されます。この建物に暮らしていた人は、これらの古墳に葬られた首長の側近、あるいは首長その人かも知れません。

中世の遺構には、溝によって区画された宅地が2区画と、その中に建つ掘立柱建物跡と木組みの井戸跡が2基あります。



井戸跡の立ち割り状況

今回の調査では、すでに市街化が進んでいたにもかかわらず、地下には良好な状態で遺跡が眠っていることが判りました。遺構の出土状況から、遺跡はさらに周辺に広がる大規模なものであると予想でき、調査を継続すれば、高畑町遺跡の実態をより詳細に把握することができるものと期待されます。



掘立柱建物跡の発掘状況



遺跡と周辺の景観

わたしたちの仕事 —普及活動・施設案内—

普及活動には、展示事業（現地説明会・展示会等）や出版事業（情報誌・調査報告書等）があります。

私たちの事務所では、ここ数年、小学生の皆さんの施設見学を受け入れてきました。本年度も、すでに2つの小学校の方々をお迎えしています。

◎平成8年4月26日（金）晴れ

神戸市立湊川多聞小学校 6年生50名+先生2名

◎平成8年6月21日（金）雨

神戸市立荒田小学校 6年生35名+先生2名

学習指導要領の改訂に伴って、博物館等の活用や、地域の身近な遺跡や文化財を活用した教育の方向づけがなされました。

埋蔵文化財にふれ、歴史への興味・関心を持ってもらうには、私たちの事務所を見学していただくことが、早く確実な方法かと思ひ大歓迎しています。

最初は、遺物に触るということで、奈良時代の窯跡から出土した須恵器の接合を試みてもらいました。

“うまく、くっついたかな。”



次は、縄文土器と木製品の観察です。^{なわひも}縄紐と^{かいがら}貝殻を使用して、粘土板に文様をつけてもらいました。木製品は水漬けです。“どうしてかな。”



最後に、木製品と金属製品の具体的な処理方法の説明を聞いた後、実際に木製品を真空パックしたり、鉄製品の錆落としを体験してもらいました。

短時間でしたが、一人ひとりの興味を引く何かがあったことと思います。今後、博物館等が行っている石器や土器作り等を体験されると、原始古代の人々の生活がみえてくるかも知れません。



編集後記

◇梅雨も明け、暑い夏が始まりました。22号は木製品を特集してみました。如何でしょうか……。

◇県下出土の様々な木製品は、古くから人間生活に入り込み、道具の多くの部分を担ってきました。これを保存するのも、私たちの仕事です。

◇自然との共生ということからも、『木の文化』を守っていききたいものです。ところで、皆さんは木の種類を幾つくらいご存じですか。松・杉・檜・樅・栗・樺・柿・桑・桐・楠・柳・桜……。

◇次号は、阪神・淡路大震災の復興事業に伴う発掘調査を特集いたします。支援職員の皆さん方の活躍ぶりを……、ご期待下さい。 (S, O)